

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	形相が内在するとはいかなることか
Author(s)	渡辺, 邦夫
Citation	茨城大学人文学部紀要. 人文学科論集(35): 67-78
Issue Date	2001-03
URL	http://hdl.handle.net/10109/2193
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

形相が内在するとはいかなることか*

渡辺 邦夫

「わたしの父は毎日研究室で、カテゴリーを顕微鏡
観察しています」—— 6年1組 わたなべ あんな

Abstract

In his *Metaphysics* ZH Θ Aristotle asks both what are substances and what the criteria of the substancehood are. He concludes at H6 that the primary substances are forms (essences) on account of which individual substances 'exist' (in some important sense of the word) and are therefore, each of them, derivatively one. In this paper I try to articulate the chapter and to make clear in what sense this derivation will be meaningful and, finally, to support the view that for Aristotle the unity of matter and form realized in an individual substance was something essentially demanding further scientific and philosophical elucidations, no truism or the simple matter of fact. Aristotle's argument runs roughly as follows; the causes of the composite substances (both individual and universal) are the efficient ones, which in turn signal which forms are relevant in given situations, and the relevant forms thus specified as such, which in a new way of Aristotle's locution are the *actualities* of their potentialities (matter), are the 'causes' of the unity and the existence of their instances. More precisely, they are the causes of the 'existence' in the sense of *duration* or *persistence* of both themselves and their instances, while efficient causes are the ones of such 'entities' as are subject to coming-to-be, passing-away and all sorts of changes. Thus, the actualities themselves are fundamentally one, and this is why ordinary individual things are derivatively one, though of course the concrete activities of the actualities themselves and the substantial reason why they are respectively one should be investigated and tested in relevant inquiries.

『形而上学』ZH Θ の三巻には、何が実体か、実体の規準は何か、という二つの問いを巡って、判読するのに容易でない考察の足跡が記されている。この二つの問いがどのような最終回答を得たのかも、一読しただけではわからない。小論では、一つの有力な回答箇所候補であるH6の解釈を提示し、(1)ZHで第一実体探しは「形相(もしくは〈種〉)¹⁾」という正式回答を得たこと、にもかかわらず(2)アリストテレスは回答の鍵を握るエネルゲイア概念の解明を Θ 巻で果たしたこと、この2点を、無理のない形で正当化したい。

I

H6においてアリストテレスは、定義の一性を巡る難問に最終解決を与えようとしている。難問とは、「二足の動物」という人間の定義において、定義項には最少二つの異種の構成要素

があるのにこれらが単一者を表示するのは、いかなる事情に基づくことか、というものである。定義的ロゴスが一つのものであることは、たとえば『イリアス』篇が一つながりであることよりも強い意味で一つであるのでなければならず、単一者のロゴスであるからでなければならぬ(1045a13-15)。アリストテレスはこの「難問」は、「二足」と「動物」のそれぞれ表すものが、形相と質料であり、また現実態におけるものと可能態におけるものであるならば、²⁾もはや「難問にはみえないだろう」という(1045a23-25)。

なぜなら、この難問は、衣の定義が青銅の球である場合と、同じであるから。というのも、この名はロゴスの印となろうが、そうすると探究されているものは球と青銅が一つであることの原因であることになり、もはや難問にはみえないからである。なぜなら一方は質料であり、他方はかたちなのだから。いったい、生成があるものどもにおいて、可能態においてあるものが現実態においてあることに、作り出したもの以外に、何の原因があるだろうか。なぜなら、可能態において球であるものが現実態において球であることには、ほかの原因は何一つなく、これが、それぞれのものにとっての何であったか、なのであった。(1045a25-33)

この非常に難解な箇所において、「ほかの原因は何一つなく」(a31-32)は「作り出したもの以外に」を補って考えられるべきであろう。³⁾そして、「これが(τοῦτ')」(a33)は「可能態において球であるものが現実態において球であること」(a32-33)を指すと考える。この解釈において、可能態においてある質料から現実態においてある結合体が生成するという事態が問題である。このような生成現象は、離散的形相であるプラトンのアイデアを導入して説明するのがそもそも不要かつ不適切な現象であり、自然的生成では生む同種のものが、そして人工的生成では制作者が、要するに起動因があれば、それで十分である、というのが、Z8, 1033b16-1034a5におけるアリストテレスの強い主張であった。⁴⁾ここでは、同じくプラトニストを第一の論敵として(cf. e.g. 1045a18 κατὰ μέθεξις), アリストテレスのぎりぎりの哲学的立場が表明されている、とみるのが自然であろう。「これが、それぞれのものにとっての何であったか、なのであった」という引用最終箇所の主張は、それぞれのもの、つまり、可能態における球と現実態における球のそれぞれが、球であることは、起動因による説明以外に外的な要因を動員して説明するに及ばないような、(さしあたりプラトニストとの絡みでいって)基底的事態である、という主張である。(ただしこの主張が、アリストテレス哲学自体の水準からみて、この事態がそれ以上の説明を要しないということまでは含意していない、ということは、これに続く箇所の解釈で重要となる。)

以上のようにみると、引用箇所ではアリストテレスは、Z巻の生成論で繰り返した自らの主張を再確認しているのにすぎない。しかし問題はむしろ、これに続く定義の一性に関するかれの説明をいかに解釈するかにある。ここで、従来の解釈は定義の対象(たとえば「人間」

で表されるもの)を形相とみるか、形相と質料の結合体とみるかで二分される。しかし私見では、これに直接続く箇所(1045a33-35)が普遍という結合体としての人間に関わることは明らかである。(ただし、後にみるようにここが最終決着の場面ではなく、質料と結合されていない形相実体の定義に関しては、1045a36以下の議論が別に用意されている)。そのような結合体をアリストテレスは、Z10で「人間や馬やこのように個別的なものの上に立つものであって普遍的なものは、実体ではなく、このロゴスと、普遍としてのこの質料(τισδι τῆς ὕλης ὡς καθόλου)とからなる結合体である」(1035b27-30)「部分といっても形相の部分もあれば(形相とは何であったかのことである)、形相と質料そのもの(τῆς ὕλης αὐτῆς)の結合体の部分もある」(b31-33)のように説明する。そしてこの普遍(的結合体)もまた、形相と並んで、定義の対象であることを明記している(Z10, 1035b34-1036a1; Z11, 1036a28-29; Z12, 1038a6-7)。そのような普遍的結合体がこの主題であることは、個別の結合体を巡る事情が、じかに定義対象の説明に使用されることから、疑い得ないと思われる。

しかるに質料にも、思惟的質料と感覚的質料とがある。そしてロゴスにもつねに、質料と現実態がある。(1045a33-35)

ここではアリストテレスは、定義項のうち、類が質料であり種差が形相であるという、Z12, 1038a5-6とこの章の1045a23-25で提出済みの論点を利用して、これらが一つであることには問題がない、と主張している。普遍的結合体である人間の質料は、ソクラテスとカリアスそれぞれの質料を普遍化したもの、Z10の言葉では「普遍としてのこの質料」であろう。それがここでは思惟的質料として考察範囲に組み入れられている。これは生物学の現場で捉えられるというみで「この」質料である。かつ、観察されるというよりは理論の対象であるという意味で「思惟的」である。人間の質料であるためには、一般に様々な制約がある。この研究は、むしろ生物学の最大課題の一つである。これは同時に、人間がいかに発生するか(そして、いかに転化し、また滅びるか)の事情の探究であるといえるであろう。「ヒトはヒトを生む」ことを考慮に入れるとき、われわれは初めて種ヒトの一性を捉えることができる。これが、この箇所でのアリストテレスのメッセージである。

では、これで問題は終わりなのだろうか。けっしてそうではないと考えるべき理由がいくつかある。

(1) Z10でアリストテレス自身が、普遍的結合体を導入するにあたり、これを厳密な意味でのかれの実体(形相もしくは現実態)と区別していた。後者もまた定義の対象である。かつ、そもそも質料的要因を無視しがちなアイデア論者に対しても、結合体の一性の説明で終わるのは、アンフェアである。

(2) 実際にこれに続く箇所「まさに一つの何か」「まさに存在する何か」(1045b1)が主題と

なる。これは発生・生成消滅・変化の相とは区別されるいみでの、存在・持続の相で捉えられた形相実体であると思われる。

(3) 現実態は未だ説明されていない概念であるが、これの導入の意義は、(a) それ自体がすぐれて「一つ」であり、(b) 個体に一性を「付与」する、という二段構えで説明されてしかるべきである。アリストテレスはH巻の終わりであるこの箇所からこの課題に取り組み、Θ巻一巻をこの究明に費やした。

以下、続く箇所の解釈を提出する。そのためにまず、H6以前における、形相の優位性に関するアリストテレス的論点を復習しておく必要がある。

II

種は類と並んで個体成立後の (post rem) 分類概念にすぎない。このいみでの εἶδος は、すでに『範疇論』の時期から、「第二実体」として、個体実体の後に来るものにすぎなかった。これは普遍であり、結合体であって、「複数のものに帰属するような自然本性をもつもの」(Z13, 1038b11-12) である。そしてまさにこの、本質的に述語的な性格のゆえに実体でないとして、『形而上学』Z13, 1038b8-11 でも断じられている。

『自然学』と『形而上学』中心巻においては個体実体は内部の分節に応じて形相 (εἶδος) と質料の結合体と見なされる。このいみのエイドスが「それぞれのものの何であったかにして第一実体」(Z7, 1032b1-2) である。これは究極主語の座を、質料と結合体との間で争い (Z3), それ自体としていかなる範疇のいかなる形容も受け付けられないような質料と、「実体にほかのことどもが述語づけられ、実体は質料に述語づけられる」(1029a23-24; cf. Z13, 1038b5-6; H2, 1043a5-6) ような関係にある。すなわち、付帯条件なしには、形相は質料の述語であり、主語規準が唯一の実体の規準であれば、質料こそ実体であることになる。しかるに、主語規準は「或る・これ (τόδε τι)」であり離存的であるという二つの補助規定 (1029a27-28) の補完を受けて初めて実体性の規準として機能する。ここから、形相と結合体のほうが質料より実体としてより先であり (1029a29-30), さらには形相が最も先である (1029a30-32)。そしてこの形相は同時に、自体的存在としてももの本質であり、その定義が学問的関心を引くようなものである (Z4 以下)。こうして、主語規準と自体性規準から形相もしくは〈種〉が第一実体であるという大筋が見えてくる。この二規準の連関は、次のように解釈できる。すなわち、個体実体としての結合体は、その発祥からして、質料に形相が述語づけられるという (質料そのものにとっては付帯的な) 関係性のなかでも捉えられる。これは実体的生成消滅の場面が生物研究の最重要場面であることを意味する。しかし、実体が実体としてすぐれて存在することは、これとして指されるようなものとしての何かであることを、併せて要求している。

この観点からするとき、この人やこの馬のほうがそれらの質料よりも、さらには人の本質や馬の本質という意味での形相のほうが個体よりも、確定した存在者であると言わなければならない。指示という観点からは、質料は、やがて何になるのかという点から、「何ものか」ですすであるもの（形相具備の個体、もしくは現実態においてあるもの）を起点とする、いわば遡行的な視線によって辛うじてこの（可能態における）ものたりうるのである。この視線は生成に先立ってあるいみでの質料のみならず、現在のこの身体やこの素材についても通用するのであり、それらが何を作り上げているのかという視線として、テロスに向かうものであるような「これ」へと遡及することになる。

われわれはこの人の存在をあくまで人として時空的に追いかける。それ以外の追いかけ方（ここにある物体、かくかくの時空座標を占めるもの、この角度でこうみえるもの、等）では、さしあたり擬似的「指示」は成り立つにせよ、いまだにこのものの、このものの性を捉えていない。それ以外のものすべてとの識別も成り立っていないし、それ自体を最後まで追跡できる保障もない。これに対し、身体・骨肉のほうは、人としてのはたらきのためのものとして、組成が大幅に変わって初期とまるで物質的に入れ替わっても、人の身体・骨肉でありつづける。

このような指示の関係における、事実以前に事実を準備する (ante rem) 形相もしくは〈種〉の働きは、かつて井上忠教授の記念碑的業績で明確に区別された⁵⁾ように、分類述語としての種語のはたらきの〈述べ〉と別立てに、〈掴み〉として指示それ自体を成り立たせる機能とすべきである。そしてこの日常的指示機構が、生物学研究においても、他のいかなる研究においても、暗々裡に前提されていることもまた、疑いなかろう。こうして、個別科学の単なる成果としてでもなく、また、たとえば神学的テーゼのごとく巨大な前提群から帰結することとしてでもなく、アリストテレスの「哲学」を語ることは可能なのである。

以上のことは、事柄としても解釈としても議論をさらに要する。しかしいまは、これらの論点と H6 の形相にかかわる叙述が、いかに関連するかをみることにしよう。

これに対して、思惟的質料も感覺的質料もたないかぎりのものは、それぞれが直ちにまさに一つの何か (ὅπερ ἐν τι) であり、これは、それらがまさに存在する何か (ὅπερ ὄν τι) であると同様である。すなわち、直ちにこれ、どのような、どれほどなのである。それゆえにまた、定義中に「存在するもの」も「一つのもの」も内在しないのである。そして何であったかは、存在する何かであるように、一つの何かである。それゆえにまた、これらのどれ一つとして、一つであることの別の原因もなければ、存在することの別の原因もない。なぜならこれらのそれぞれは直ちに存在する何かであり一つの何かであって、存在するものの類とか一つのものに内在するからそうなのでなく、また、個別なものとは別に離れてあるからでもないのである。(1045a36-b7)

ここで話題になっている、質料をもたないものとは何のことだろうか。通説によれば範疇それ自体のことであり、これの一性がそれ以上の説明を要しないことがこの論点である。しかしこれは文脈上不自然な解釈であり、渡辺およびハート⁶⁾のように、範疇の項としての質料抜きのものであり、実体範疇においては各形相と捉えるのがよい。すなわち、私見では、ここで「人間」の定義の問題から、さまざまな形相的なもの、とりわけ(実体範疇の一項としての)人間の本質としての形相もしくは魂の定義の問題に話題が転換⁷⁾している。これは「人間」が結合体と形相の間で多義的であるという事態とも、「人間」が指す結合体と「人間の心(魂)」が指す形相・現実態の間の問題とも表現できる。アリストテレスの言葉遣い⁸⁾は後者に有利であるように思える。魂は最低種ごとに定義が異なる(*De Anima* B3, 414b25-28)が、その雛形としては、周知の「可能態において生命をもつ自然物の第一の完全現実態」(B1, 412a27-28. cf. a20-21, b5-6)が与えられている。そしてこれは、人間の魂の場合、これまで周知の階層性を込みにして語ると、「栄養摂取的なもの・感覚的なもの・思想的なもの・運動によって規定されている」(B2, 413b12-13)のように、雛形に即した機能の説明の組であって人間の本性を構成する規定が、最終的な回答を与えると予想できる。これらは(完全)現実態=自己目的的な活動(*ἐντελέχεια, ἐνέργεια*)をもって答えるものである。すなわち、人間であるからには何をするか、或いは、何をし続けるかという問いへの適切な答えが、定義項に来る。このように規定できる、質料を欠く形相そのものは、引用文中の「そして何であったかは、存在する何かであるように、一つの何かである」(1045b3-4)で言及される。他の範疇の項そのものと同様、各最低種の形相は、それ自体が一つのものであることに何らの説明も要しないような、むしろ、あらゆるものの「一つであること」の理解の雛形となるような、根元的一者にして存在者である。それは、魂というありかたが、人間の本来的な活動もしくは状態によって、余されることなく規定できるということである。そしてわれわれは、人間を数える際、或いは、或る人を指示するとき、有魂な(特定形式の生をもつ)存在者としてその人を数え、指示しているのである。

引用箇所の意味内容は比較的明らかではないだろうか。われわれはさまざまな一者どもに初めから遭遇しているのであり、それらを超えて単一の「一者そのもの」や「存在者そのもの」を求める必要はないし、求めることはできない(プラトニストのように。1045b8-9)。さらに、一者の根元的場面として知識と魂の出会いのようなものを想定するには及ばない(リュコプロンのように。b9-12)。むしろわれわれが一人一人であること、馬が一頭一頭であること、このように数えられる単位(units)としての人や馬の一性(unity)に代わる一性は他にない。そしてこのいみでの一性は、日常から探究の場面に舞台を移すとき、根本的存在者としての形相の措定が、普遍度の高い類の措定以前に、全く自明のものと思なされなければならないことの根拠でもある。こうして、形相の一性は、日常で還元不可能と思なされなければならないと同時に、科学探究の場面でも他によって説明されることがないような、根本的なものである。このいみで、アリストテレスの第一実体探しは、H6のこの部分で、最低種

の形相こそそれであるという形で、決着をみたのだと思われる。⁹⁾

以上の解釈で、釈然としない部分が残っていることだろう。それは結合体の一性と、形相の一性との、説明における一義的な先後関係もしくは依存関係が、語られていないことによる。わたしはこの点の沈黙は、アリストテレスが事柄自体の難しさをよくわきまえていたからだと考えている。数的な一性と種(形相)的一性の関係は、議論の場を特定しない場合、単純にどちらかが先行するものとは言いがたいのである。しかしもちろん、実体論はまさにこの先後関係の問題に主題的にかかわるものである。以下、この点を瞥見して小論を締めくくりたい。

III

われわれの問題は、結合体の一性にかかわる箇所の解釈が、形相を原因として立てるものになり得ない、ということを引きつけて生じている。すなわち、定義の一つの対象である普遍的結合体は類と種差から定義されるが、この二項の一性の説明は、各個体の発生時の起動因によるということである。問題となる箇所をもう一度引こう。

いったい、生成があるものどもにおいて、可能態においてあるものが現実態においてあることに、作り出したもの以外に、何の原因があるだろうか。なぜなら、可能態において球であるものが現実態において球であることには、ほかの原因は何一つなく、これが、それぞれのものにとっての何であったか、なのであった。(1045a30-33)

デイヴィッド・チャールズによれば、1045a33の $\tau\omicron\upsilon\tau'$ が a32 の $\alpha\iota\tau\iota\omicron\nu$ を指すとするならばわれわれは、「何が形相と質料を一つにするか」という問題が、みせかけでなく真正の問題であることを承認することになり、「説明的アプローチ」を採用することになるが、可能態における球が現実態における球であるという事実を指すとすれば、「非説明的アプローチ」に組み立て、この問題は、真正のものではないとすることになる。¹⁰⁾ わたしはこの問題で非説明的アプローチに組み立てること、すなわち、形相も質料も、そもそも或る物質的個体実体の形相と質料なのだから問題なく一つだ、などという見解¹¹⁾に荷担することは、アリストテレス的でないと思うが、しかしこのギリシア語の読みとして、チャールズの推奨する指示は無理であると思う。「ほかの...は何一つなく」という脈絡での「原因」を「これ」で指すというのは、どちらかといえば曲芸ではないだろうか。むしろ、可能態における球が現実態における球であるという事実を指す、とする自然な読みを採用して、その上で説明的アプローチに準ずる何らかの見解に辿り着くことをめざすべきである。

一つの鍵は、「これが、それぞれのものにとっての何であったか、なのであった」で2回使

用される未完了過去形の ῥν (a33) にある。ここでの未完了過去は、継続および継続的存続の相を強く匂わせる。それは何であり続けたか、もしくは、あり続けているか、という問題は、たとえば「球」という回答をもたらすであろう。これが、文脈によって、直ちに原因を問う問いであるわけでないことに注意する必要がある。アリストテレスを離れたとしても、われわれは生成するかぎりでの個体にかかわる場面で、原因として起動因以外のものをほとんど挙げ得ないのではないだろうか。もちろん、原因といい、説明といえ、関心のあり方に依拠して、さまざまな答え方がある。アリストテレスの四原因は、そのような還元不可能な多様性の、歴史上初めての認知であったとも言う。しかしテキスト上ここでの生成するような個体と、そのようなものとしての個体どもを包摂する普遍に関して言えば、たとえば本質因も、目的因も、質料因も、単独では存在するに至ったことの適切な説明ではないと思われる。これらは別の関心で「原因」ではある。しかしたとえば本質因は、ここでの関心からすれば「何として存続しているか」という、原因を答えるよりまさにあり方もしくは正体を答える場面で適切な答えであるように思われる。

このことは単に言葉遣いや語用論、談話の文法の問題なのではない。この個体は単に「本質によって」存在して一つであるわけではないし、この普遍にしてもその事情は同じであるからである。「本質により一つの個体」は、「質料により一つの個体」と同様、辻褄の合わない記述であって、もちろん、本質とともに質料があるので結合体なのであり、そのようなものとして一つなのである (cf. Z8, 1034a2-8)。これ以外の、形相質料いずれかに偏した語り方は、こと結合体に関するかぎり、アリストテレスの徹底的枚举の精神に反する。唯一無害でありかれの真骨頂をも表す単純な語り方は、テキストにあるとおりの起動因を挙げるものである。

したがって起動因一個を挙げていることには問題はない。しかし同時に、関心が変われば、アリストテレスの四原因それぞれの適切性も違う様相を見せる。私見では継続の様相における未完了過去形は、1045a36 ὅσα δὲ ... 以下の、形相実体における、一つであることとあることの直接性の主張において説明されることになる。何であり続けているかという、当のものの根本的記述は、結合体レベルでは適切な記述の問題だが、形相の側から通時的同一性と同種性に焦点を当てる場合には、そのものの原因の問題になるのだと思われる。このことはまた、結合体レベルでの起動因の、際だった重要性和無関係なことではない。何であり続けるのかという問いへの答となることができるのは、自然物の場合には最低種にあたる形相であり、これは起動因が起動因であるかぎりもっているものである。人工物の場合にもそのものの形相であり、これは技術的生成において制作者の魂に内在する技術的要因そのものとして、起動因たることの内容を形成している。起動因は適切な形相を選別的に指示する。こうして、1045a36 の接続表現が単に並列的であり、生成消滅する結合体に注目する場面から存続する形相に注目する場面に話が移行していることは、かえって、両場面が切っても切り離されない関係にあることを示唆しているのである。

最後に、2点に触れておきたい。一つは Z13 以来の、形相が個か普遍かという問題である。わたしは個でも普遍でもない¹²⁾と考えるが、このことの部分的正当化を行いたい。第二に、Θ巻の議論と「現実態」の導入の意義について若干のことを付け加えておきたい。

個体も普遍もアリストテレスの成熟した言い回しでは「結合体」であって、個体の一性については、形相が同一性の側面（通時的同一性と同種性）をすべて受け持ち、質料が差異性の側面（通時的差異と他の同種個体との差異）をすべて受け持つ（Z8, 1034a2-8）。この点は、個体どもに共通なものとしての普遍的結合体（Z13, 1038b11-12）にも、水準を変えてあてはまる。それは類的同一性と、種差によって説明される差異をあわせもつ。だがアリストテレスの第一実体である形相は、それが「それぞれのもの」に固有でなければならないがゆえに、普遍ではない（b9-11）。この固有性の条件は、個体に固有、ということではない。むしろ Z6 以来の、実体候補が自体的であり本当に実体ならば満たさなければならない「（申し立てによる実体の）それぞれはその本質と同一でなければならない」（cf. e.g. 1031a15-16, 28-31）の言い換えであろう。この条件は結局のところ、H6 の形相実体の「直ちに一つ」という論点によって、形相のみが満たすと判明することになる。¹³⁾ この、本質との直接同一性は、何かとの差異込みになり立つのではないことに注意する必要がある。われわれはたとえば人間の（魂の）本質を問う。このとき、われわれは事後的に、個々の人間を原子とする分子を求めるように、探究しているのではない、と言いたい。なぜならわれわれが共同性ぬぎに、たとえば公共の言葉ぬぎに人間でありうるとは、思われぬからである。したがって、すでにして何ごとかを共有して初めて一つであり、この意味で分子的であるわれわれにおいては、人間性（もしくはヒトの魂）があらゆるものの初めにあるのである。この形相は（奇妙にきこえるが）同一性のみの存在である。こう考えないと学問の普遍性と、事実に対する先行性とを、同時に擁護することができないからである。したがって、形相は、それ自体としては個でも普遍でもない。

現実態は形相の言い換えだが、こう言い換えることによって、まず第一に、現実的に一つのものが可能的には二つであること、或いはその逆ということが語りやすくなる。もともとの問題は、実体の定義に纏わる、単一実体が現実的に複数の実体からなるということはあるえない、という Z13 章末の難問（1039a14-22）の論点に由来する。H6 ではアリストテレスは、類が可能態にすぎず種差がその現実態であるというかたちで、結合体の定義の成立を論じ、さらに可能態から現実態に連なってゆくものの存在根拠としての形相の直接的存在と一性を主張している。この形相を、実際に個体を個体「たらしめる」はたらきとして、経験の場で捉え返す必要があるように思われる。これが私見では『形而上学』Θ巻全体の課題である。すなわち、人間の形相の場合であれば、人間としてだれもが果たす事柄は何かということである。このような、現実活動の中味に踏み込んだ考察が始まらないことには、H6 の定義の形式にかかわる論点は、検証も反証もされない。

したがってわれわれは、チャールズのいう説明的アプローチに近いものを得ている。しか

も、それだけではなく、やや科学の場面に話を限定しすぎの感があるかれの解釈に対し、日常性の忠実な再構成という、もう一つのアリストテレス的課題がありそうであることを、予想することができる。かくして、たとえばわれわれは、「みると同時にみてしまっている」「生きると同時に生きてしまっている」「よく生きると同時によく生きてしまっている」のような命題群をアリストテレスから、問題のないものとして認めよと迫られる(Θ6, 1048b18-35)。このような現在時制と現在完了時制の同時成立においてわれわれは、テロスに単に向かうことでなく、ここでこうして生きていること自体が、すでにしてそれ自体におけるテロスとして、むき出しになって与えられているさまを、実感することになる。¹⁴⁾

*本稿は2000年9月16・17日に東京工業大学において開催された「ギリシャ哲学セミナー」における同タイトルの発表原稿に最小限の修正を加えたものである。司会の労をとられた千葉恵氏をはじめ、刺激的な質問をしてくださった参加者諸氏に感謝する。

注

- 1) 質料に付帯的に述語される形相を、個体に自体的に述語される種と区別するのは、Michael Loux, *Primary Ousia* (Ithaca and London 1991), pp. 109-146 など。主語以前に掴まれる〈種〉を、主語の個体指示以後に、個体について述べられる種と区別するのは、井上忠「個と種」(『哲学の現場』, 勁草書房 1980年, 165-197頁), 173-178頁。
- 2) 類を質料(もしくは可能態)とすることは、単なる類比ではない。実際にわれわれが「動物という存在者」に出会うのは、馬と驢馬から「騾馬という動物」が生まれるような場合や、一定種の動物の形相もしくは種の本質が「未だに」あるいは「もはや」ないといった特殊な場合に限られるように思われるからである。これらはすべて、一定動物種個体の形相が剥奪され、(その都度の準形相とともに)裸の質料が露わになる場合である。
- 3) これは金子善彦氏の着想である。「全体と部分の関わりについて——アリストテレス実体論の観点から——」(『アカデミア』67(1998), 437-469頁), 466頁以下参照。氏との口頭の議論により、大いに教えられた。
- 4) 桑子敏雄「同名性の問題」(『エネルギー』, 東京大学出版会 1993年, 3-28頁), 13-22頁が、類似にまさって、発生に関わる同種関係こそが問題であることを明確に示した。この箇所解釈につき、わたしの「形相と質料」(茨城大学人文学部紀要『人文学科論集』20(1987), 183-210頁), 192-195頁も参照。
- 5) 注1参照。ルーなどの、形相の述語性を強調する解釈と袂を分かつべき最大の根拠は、日常の言語に対する適正な焦点の当て方にかかわるものである。われわれの自然言語が、はじめコエによる反応の一形としてコトのヘングに向けられていたことは疑いないにしても、言語という最大の制度として現在われわれを縛るのは、それが有るものどもについて或ることを語るという、一応であつても安定・継続の相に中心的な役割を移したことによると思われる。このことを通してわれわれ自身もまた、「日常の」生活というものを、根本的な次元で、理解しているように思われる。そこには、日常であるかぎり、ヘングはない。あるのは日常自体が形を変えるときである。かくして、たとえばわれわれは「死というもの」を恐れる。これはいわれのないことではない。(ゆえに、これを、選択の場面でのわたしの死の全面的拒否にすりかえ、矮小化することをしなかった点で、ソクラテスは本当にエラかったのだ!) このような、存在が中心に来てヘングが周縁に来るといふ、或る段階

における言語の、いわば暴力的な地政学の強制によって、われわれの全思考も全行為も、むろん縛られている。井上説はこの原初的暴力に、ひとまず全面的に荷担するといういみで、人類史と人間本性に対する感度が際だって高いと言える。そしてこの説がこの程度に興味深いということは、とりまなおさず、すでにアリストテレスその人の説であると証明されたようなもの、ではないだろうか？ 少なくとも Z3 における、「主語」規準に関するかれのきわめて慎重な態度は、われわれの推測を裏付ける。さらに、さしあたり必要となる ZH の文脈仮説については、渡辺「現実態 (一) — 定義項の単一性について —」(茨城大学人文学部紀要『人文学科論集』21 (1988), 177-209頁), および「現実態 (二) — 『形而上学』Z 卷第十三章とその文脈 —」(茨城大学人文学部紀要『人文学科論集』22 (1989), 137-171頁) 参照。わたしのこの 2 研究では形相述語文について、これをやや軽んじて論じたが、この文のアリストテレス哲学におけるそれなりの役割を認知してもなお、文脈仮説そのもの (形相を質料の述語とする自然学的見方は、Z17 で導入されたが、H6 の本当の結論部では、アリストテレスの問題とはなっておらず、方法的に一度荷担した見方にすぎない) は形相実体の主語性にかかわるわれわれの意味の置き方に関する見解の正当性の問題として、それなりの修正を施せば、生き残ると思う。

なお、以上の論点は、拙稿「個体について」(茨城大学人文学部紀要『人文学科論集』34 (2000), 59-71頁) 注 1 において自分に課した宿題に対する答えの第一弾である。

- 6) 渡辺「現実態 (一)」199-203頁, Verity Harte, 'Aristotle *Metaphysics* H6: a dialectic with Platonism,' *Phronesis* XLI (1996), 276-304, p. 290.
- 7) ハートは H6 の主題が一貫して形相であると考えている。そして思惟的質料は数学的質料に限られると見なしている (pp. 287-289)。しかし Z10, 1035b29-30, b33 の普遍的結合体の、思惟的としか見なしような質料は、1036a4 οἶον による説明以前に、文脈から幾何学的でも数学的でもなく明らかにサンプル個体どもの質料からの一般化と解釈できるから、この点での論証は十分でない。さらに、ハート自身の認める 2 つの難点 (第一に、1045a34 ἀεὶ ではロゴスがつねに質料の部分を含むことになって形相の定義が排除されること。これについてはハートは満足な回答を出していない (p. 297)。一方わたしの解釈では、この部分は普遍的結合体の話に限定されるから、自明の主張となって問題は生じない。なお、形相自体の定義が ἐνυλος でなければならないという『靈魂論』的な問題は、たとえば「身体 (質料, 可能態) の現実態 (形相)」という定義形式の議論なので、この問題とは独立である。第二に、a25-26 の文の、結合体の一性が一貫してこの文脈の問題であるという含み。これも、彼女によって解消されているようにはみえない (pp. 298f.) はいずれも致命的である。なお、わたしの解釈に関し、途中から結合体の話が形相の話になってしまうのは「奇妙」であるという印象があるかもしれない。しかしアリストテレスの単に並列的な接続表現 (1045a36 ὅσα δὲ ...) は、それ以前の議論すべてが結合体 (個体と普遍的結合体の両方) にかかわっていたことを含み、この解釈にむしろ有利であるし、プラトニストがたとえば「人間」を形相と結合体の間で多義的に語らざるを得なかったとすれば、イデアが個体にして普遍であったとするアリストテレスの一般的診断 (Z13-16) と軌を一にすることになって、かえって好都合であろう。また、H6 最終箇所もわたしの解釈を裏付ける。そこでは質料をもつものの一性の原因は起動因以外にないこと (1045b21-22 ὥστε αἴτιον οὐθὲν ἄλλο πλὴν εἰ τι ὡς κινήσαν ἐκ δυνάμεως εἰς ἐνέργειαν), 質料をもたないものは無条件的に一つの何かであること (b23 πάντα ἀπλῶς ὅπερ ἐν τι) の両方のことが、文字通りに再確認されているからである。
- 8) Cf. Z10, 1035b27-1036a2, esp. 1036a1-2: τὸ γὰρ κύκλω εἶναι καὶ κύκλος καὶ ψυχῆ εἶναι καὶ ψυχὴ ταυτό. ただし Z11 では、「ソクラテス」や「コリスコス」が魂そのものか結合体かで多義的であると言われる (1037a7-10)。
- 9) 「現実態 (一)」202-3頁および「現実態 (二)」160頁参照。
- 10) David Charles, 'Matter and Form: Unity, Persistence, and Identity,' in: *Unity, Identity and Explanation in Aristotle's Metaphysics* (ed. T.Scaltsas, D.Charles and M.L.Gill) Oxford 1994, pp. 75-105, pp. 87ff., esp. n. 21.

- 11) Charles, *ibid.*, pp. 76-79.
- 12) 「現実態 (二)」の Z13 解釈でこのことを主張した。
- 13) まとめるならば、アリストテレスの第一実体探しは、Z3の主語規準と、Z4に始まりZ6で本質との同一性という条件に集約され、Z12, 13で定義対象の一性の問題に局限された自体性規準の二つにより、形相ということで決着をみた。Z3は短いが、この議論の文脈では最重要の章の一つであることになる。このことは掴みの論点という、現在の日本の学会においてさえ忘れられがちな解釈のポイントが、きわめて重要であったことを意味する。また、H6について、過剰な期待を抱くべきではない、ということも重要ではないだろうか。最近の研究は、Z17とそれ以後の全体部分関係に関して、めざましい成果をあげている。しかし、質料を主語とし、形相を述語とする文に焦点を当てたそのような研究は、それ独自の意義に関し、H6では十分に評価されていないように思える。これは私見ではH6のアリストテレスが、Z3の主語規準とZ4以下の自体性規準の両方を見据えて、高度の「政治的」重要度判断を行ったためである。わたしの解釈ではしたがって、H6はそこまでの議論の舌足らずな要約 (understatement) になる。これは言い過ぎ (overstatement) よりはアリストテレス的であり、続くΘ巻の意義をも確保する態度であろう。
- 14) 以上の考察において、H6の定義が「人間」を巡るものであることは偶然ではないと前提している。